

【研究ノート】

地域との連携に根ざしたキャリア教育の実践

——共生社会の実現に向けた地域との協働——

田 実 潔
播 磨 正 一

研究ノート

地域との連携に根ざしたキャリア教育の実践

——共生社会の実現に向けた地域との協働——

田 実 潔 播 磨 正 一

目次

1. はじめに
2. 共生社会とは
3. 実践例
4. 考察
5. まとめ

〔要旨〕

障害やその他の理由により、不当な差別を受けることがないように障害者差別解消法が制定されているが、その背景となっているのは共生社会の実現である。特に障害のある児童生徒については、卒業後の進路選択と関連して在学中にキャリア教育の推進が求められているところである。本稿では、共生社会の実現に欠かせない地域連携の要素を取り組んだキャリア教育推進の実践例を報告することで、今後の特別支援教育におけるキャリア教育の在り方について考察することとした。北海道のA町と連携した各事業に、特別支援学校（B高等養護学校）の教員や生徒が関わっていくなかで、生徒達の中に社会の構成員であり社会に意味ある存在であるという社会的責任感やキャリア発達の思いが目覚めた実践報告から、障害のある生徒であっても地域社会の中でかけがえのない存在となれること、地域の方々からその存在が認められ、高い評価を得ることが出来るまでに認知されることができるとを示した。地域にとっても、新たな地域文化を協働して創造する結果になり、過疎化が進む地域社会にその状況を打開する明確な提言を行うものとなった。

1. はじめに

我が国が共生社会の形成を目指すうえで重要な役割を担うのが特別支援教育である。中央教育審議会の答申等のなかでも、特別支援学校が社会に開かれた教育活動を展開し、地域社会の人々と積極的に交流・協働することの重要性が述べられている。

北海道においては、養護学校義務化後の後期中等教育の充実と、近年の特別支援教育対象生徒の増加に伴い、各地に高等養護（支援）学校が設置されてきている。設置された市町村においては、長い期間自治体や住民による誘致運動をしてきた経過もあり、学校を支援する機運が高い。こうした背景があり、学校

と地域社会が連携・協働した教育活動が生まれてきている。その中から、平成25年度から始まった、北海道B高等養護学校とA町・東京おもちゃ美術館が推進する「A町ウッドスタート事業」における北海道B高等養護学校の教育実践を事例に、共生社会の形成に向けた地域社会との協働の在り方について考察する。

2. 共生社会とは

平成24年（2012）7月23日の中央教育審議会報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」では、共生社会についての定義を

キーワード：キャリア教育，地域連携，共生社会

「共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を、相互に認め合える全員参加型の社会である」としている。障害者を取り巻く社会環境が十分でないとの認識に立ち、障害者が社会と積極的に関わり、活躍できる社会を推進するとの強いメッセージと言える。

更に、共生社会の形成に向けては、インクルーシブ教育システムを構築することが必要であり、そのためには特別支援教育を充実・発展させていくことが必要であるとして次の3点を示している。

第一に、障害のある子供が、その能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加することができるよう、医療、保健、福祉、労働等との連携を強化し、社会全体の様々な機能を活用して、十分な教育が受けられるよう、障害のある子供の教育の充実を図ること。

第二に、地域社会の中で積極的に活動し、地域の同世代の子供や人々の交流等を通して、地域での生活基盤を形成すること。

第三に、障害者理解を推進することにより、周囲の人々が、障害のある人や子供と共に学び合い生きる中、公平性を確保しつつ社会の構成員としての基礎を作っていくこと。

共生社会の定義と特別支援教育の推進の3点から、障害者が積極的に社会と関わり、同世代や地域の人々と共に学び共に活動し、社会の一員としての役割を担うことを目指していることが分かる。

また、平成30年度(2018)から開始する新学習指導要領が示されているが、平成28年(2016)12月21日中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」では、これからの社会を生き抜く子供たちが、自分の価値を認識するとともに、

相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、より良い人生とより良い社会を築いていくために「社会に開かれた教育課程」の実現を求めている。

障害の有無に関係なく、すべての子供たちが、より良い人生とより良い社会を築いていくために、多様な人々と協働することの必要性を述べている。ここで言う「より良い社会」とは、当然「共生社会」も含まれるのである。

特別支援学校においても、児童・生徒がこれまで以上に社会と関わり、多様な人々と協働することで、地域社会に貢献する取組が求められる。具体的には、特別支援学校が各々の地域社会で、学校の特色を活かし、児童生徒の持てる力を十分に発揮させながら、地域の人々と協働することである。そして、その協働が特別支援学校を核とした地域づくりにつながることを目指しているのである。

3. 実践例(A町ウッドスタート事業)

(1) A町について

A町は北海道の中央部から日本海側よりの町である。主な産業は農業であるが、地方都市の人口減少が典型的にみられるところで、昭和45年(1970)当時の人口は5324人であったが、平成29年(2017)7月の時点で2518人とほぼ半減している。以前はJRの駅もあったが、廃線となりバスが主な交通手段となっている。町には現在小学校と中学校、特別支援学校(B高等養護学校)がそれぞれ1校ずつ設置されている。寄宿舎を備えたB高等養護学校については、教育関係者の期待とA町の過疎化対策という現状から、熱心な誘致活動が行われた結果、1984年に高等部単置の知的障害養護学校として開校した。

(2) B高等養護学校について

北海道B高等養護学校は、昭和59年(1984)4月開校である。昭和54年(1979)の養護学

校義務化により、北海道では義務教育終了後の後期中等教育の充実を求める道民の願いに応え、北海道独自のスタイルの高等養護学校（職業学科を置く高等部単置校）を各地に開校する。56年（1981）にC高等養護学校（道南）、58年（1983）にD高等養護学校（道東）、59年（1984）にE高等養護学校（道北）、B高等養護学校（道央）と北海道の広域性を配慮した設置となっているが、折しも、町村地域では人口流出に伴う過疎化が進む中での高等養護学校の誘致は、地元地域にとっては地域活性化の期待も込められていた。

平成26年（2014）には、高等養護学校と地元町村との連携強化を目的に「道立高等養護学校所在地町村交流・連携の会」が結成されている。

特別支援教育の進展に伴い、全国的な傾向であるが、北海道においても特別支援教育の対象となる児童生徒が増加している。特に、高等部への進学が増加し（Fig. 1）、その受け皿として高等支援（養護）学校が各地に設置されてきており、現在は道立、公立、私立を合わせると全道で25校（分校を含む）となる。

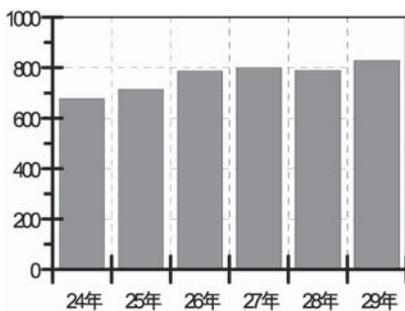


Fig. 1 北海道における知的障害高等部単置校1年生数

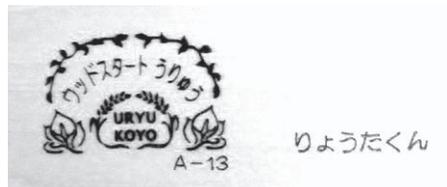
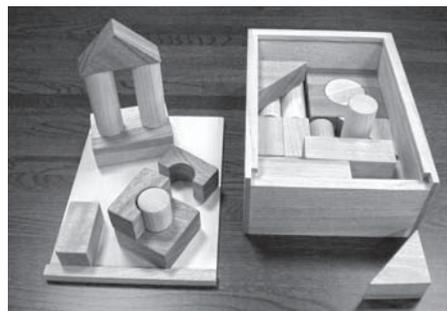
(3) A町ウッドスタート事業

A町と北海道B高等養護学校は、平成25年度（2013）から、町内の赤ちゃんへの誕生プレゼントとして、B高等養護学校木工科製作

の積み木を贈呈する「A町ウッドスタート事業」を開始している。

平成25年（2013）4月15日に町と学校で「A町ウッドスタート事業に関する協定書」に調印。同年7月24日に、東京おもちゃ美術館とA町とB高等養護学校の三者でウッドスタート協定に調印している。

第1回贈呈式は、7月24日に行われ、12組の親子に贈呈された。その後、1歳半を迎えた幼児に贈呈され、29年度末で80名となる。また、近隣の幼稚園・保育所への贈呈も年に1カ所実施されている。贈呈される積み木セットには、贈られる子どもさんの名前と個別の通し番号が刻印されている（資料1）。



資料1 贈呈される積み木セット

ウッドスタートは、平成18年（2006）に閣議決定された「森林・林業基本計画」の一環として推進されている木育事業の発展形とし

て位置する国産材の木づかい運動の行動プランである。「木」を真ん中においた子育て・子育ての環境を整備してすべての子供たちが人生最初のステージを木のぬくもりを感じながら、楽しく豊かに送ることができるようにしていく取組を目指しており、東京おもちゃ美術館（認定NPO法人芸術と遊び創造協会）が全国で運動を推進している。東京おもちゃ美術館は、認定NPO法人芸術と遊び創造協会（旧日本グッド・トイ委員会）が運営するおもちゃの美術館で、日本で唯一の優良玩具「グッド・トイ」の選定機関として1985年に設立され、おもちゃの専門資格である「おもちゃコンサルタント」を養成し、全国に5500人を超える有資格者を育てている。近年は新宿区と連携し、「東京おもちゃ美術館」の運営や国立成育医療センター、順天堂大学と連携する病児の遊び支援も積極的に推進している。実際のウッドスタート事業は、平成23年（2011）年度から東京都新宿区から始まり、現在は、全国各地の自治体で実施されてきている。また、ウッドスタートの名称ではないが、同じ趣旨で実施されている市町村もある。A町ウッドスタート事業の特徴としては、以下の6点があげられる。

- ① 贈呈品の積み木セットは、地元の特別支援学校木工科の生徒が製作しており、贈答品の監修を東京おもちゃ美術館が担当することで、安全で質の高い製品として認められ、その価値を高めている。
- ② 積み木セットは、他市町の保育所等にも寄贈している。
- ③ 贈呈式を毎回実施し、作り手である生徒から親子へ直接手渡している（資料2）。
※贈呈式の前後で、幼児と一緒に積み木で遊ぶ時間をとっている。
- ④ 贈呈の様子は、新聞や町の広報誌、町の公式ホームページ等により、地域住民に知らされている。
- ⑤ 贈呈された親子は、使った感想や生徒へ

の励ましのメッセージをハガキに書いたり、子どもが積み木で遊ぶ姿の写真を撮り学校へ送るなどのレスポンスが期待されている（作り手と使い手による双方向のコミュニケーション）。

- ⑥ 保護者から写真の提供を受け、町の施設で「ウッドスタート子ども写真展」を開催した。



資料2 贈呈式の様子

4. 考察（教育のおよび社会的意義）

- (1) 生徒の意欲向上「自尊感情（自己有用感）を高める」

ウッドスタートのように自治体が誕生祝いにおもちゃ等を贈呈する取組は、全国各地に広がっているが、作り手である職人が直接親子に贈呈する例は少なく、その多くは市町村などの自治体に納め、自治体から贈呈されている。

A町ウッドスタート事業で一番大切にすることは、作り手である生徒が直接親子に手渡すようにしたことであろう。生徒はその際、親子にどのような言葉をかけるかを一生懸命考え、緊張しながらも自分の思いを伝えている。手渡すときは、赤ちゃんが積み木に手を伸ばして受け取り、すぐにその場で遊び始める。このような光景を目にすることで、生徒たちは製作したことに喜びを感じていると思われる。この瞬間の生徒の気持ちを表した作文の一部が以下である。

「贈呈式では、赤ちゃんに積み木をあげたら、にこにこうれしそうに笑って遊んでくれました。そのとき、私は本当にうれしかったです。頑張って積み木を作ってよかったなと思いました。」

生徒達は、言葉ではウッドスタート計画の目的や内容について理解しているつもりでも、「直接手渡す」という行為を媒介させることで深く実感することができているように思われる。キャリア教育で大切にす「なぜ、何のために」(菊地¹⁾ 2013)といった問題意識を、生徒自らの体験で獲得できるこの取り組みの教育的意義は大きいものであると言えよう。贈呈式は年3回実施される。生徒たちは、1回目の経験を基に、「次は、どんな言葉をかけたらいいか」また、「赤ちゃんと遊ぶには、どのように関わったらよいか」を真剣に考えるようになり、積み木の製作にも意欲的になっていることも大きな意味となっている。

日本の子供たちは、自尊感情が諸外国の中でも低いとされている。それは高等養護(支援)学校の生徒たちも例外ではない。むしろ通常学校の生徒より多いかもしれない。小・中学校時代にいじめを受けたり、厳しい教育環境下に置かれていた生徒も少なくないからである。それゆえ自尊感情を高めるためには、この事業のように、自分たちが親子の役に立ち、感謝され、町や地域の人々から必要とされる経験を通して、自己有用感を高めることが必要である(キャリア発達支援研究会²⁾ 2015)。それは自己有用感が、自分と他者(社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる肯定的な自己評価だからである。特に、卒業後社会の一員となる高等部の生徒にとっては、社会との関わりの中で、自分が必要とされ、社会の一員として大切にされる経験を積むことは、進路指導の上からも大変重要であると思われる。

また、特に幼稚園や保育所への寄贈におい

ては、その感情が一層高まるものと思われる。園児たちは、生徒の障害については認識していないこともあり、自分の兄や姉に接するように遠慮することなく、積極的に関わりを求めてくるからである。生徒たちも、園児の積極性に押され、喜んで一緒に遊び、ふれあいを楽しんでいる。この積極性は、1歳半の赤ちゃんには見られないのであり、純粋に積み木を通じてふれあい交流する経験が、障害のある生徒にとっては、貴重なかけがえのない経験となるのであろう。

(2) 社会的責任とキャリア発達

A町では、B高等養護学校の生徒が製作した積み木は評判となり、赤ちゃんを持つ家庭だけでなく広く住民が知ることとなった。この一種の期待感は、生徒にとっては、ウッドスタート協定を結んだことの重みを感じるとともに、期日までに立派な積木を完成させることへの強い責任感を生じさせている。キャリア発達は「社会の中で自分の役割を果たすことを通して自分らしく生きる過程」とあるように、社会の一員としての責任を負うこの事業は、生徒のキャリア発達を支援する上で欠かせない取組となっているのである。

尾崎³⁾ (2013) は、共生社会の実現に向けて、インクルーシブ教育システムの構築が求められる中、障害の有無にかかわらずすべての人の生き方を捉えた概念であるキャリア教育の視点から捉え直すことで、通常の教育と特別支援教育双方の価値が共有されることが望まれるとして、教育そのものの発展を期待している。事実、A町ウッドスタート事業の取組は、平成25年度(2013)の第3回キャリア教育推進連携表彰(文部科学省・経済産業省実施)を受賞した。この賞は、学校種に関係なく、エントリーした80を超えるキャリア教育実践の中から選ばれたのである。また、平成29年度(2017)高等学校家庭教科教科書(実教出版)にもこの実践を含めた、B高等

養護学校の社会貢献の実践が紹介されている。障害の有無に関係なく、教育という同じフィールドの中で取り上げられ、共有された意義は大きい。

(3) 幼児の遊びの拡大と成長

積み木が贈呈される幼児の年齢は1歳半で、これから様々な遊びを通して大きく成長する時期である。贈呈式での様子を見ると、積み木を3個4個と積み上げ崩れるのを楽しんでいる子が多い。その後届けられた写真を見ると、家を作ったり、きょうだい仲良く遊んでいる様子から、見立て遊びやごっこ遊びに広がっていることが分かる。この見立て遊びやごっこ遊びは、人としての成長に欠かせない基本的な認知能力を養う大切な遊びであり、贈呈された幼児たちの成長発達にも大きな貢献をしているものと思われる。積み木は、フレベルが考案し、以来170年以上にわたり世界各国の子供たちに使われており、最も親しまれている玩具である。その理由としては、積み木を使うことで形や空間を認識する段階から、イメージや物語性を持って見立て遊びやごっこ遊びをする段階まで、どの発達段階の子供にも使うことができる。幅広い年代で楽しむことができ、創意工夫できる点がたくさんあるからである。また、積み木は自発的な活動を促す具体物であり、自発性は豊かな自己表現にも繋がるものでもある(鎌野⁴⁾1998)。更に、親子やきょうだいで遊ぶことは、より良い人間関係や社会性を育てることになるからである。また、加藤⁵⁾(2007)は、積み木遊びには、以下の2つの活動があるとし、その利点を述べている。すなわち、①積み木を『シンボル』として扱い、意味づけたり命名したりしながら遊ぶ象徴的な積み木遊びができること、例えば直方体の積み木を『ブーブー』といいながら自動車に見立てたり、円柱の積み木をコップに見立ててジュースを飲むなどの事例を挙げている。さらに②

積み木を『事物』として扱い、積んだり、並べたり、組み立てたりしながら遊ぶ物理的な積み木遊びができること、例えば積み木を打ち鳴らしたり、投げたり、上から落としたり、転がしたり、積み上げて高いタワーを作るなどを挙げている。特に、積み木を高く積むためには「積み木を形や長さによって分類し、長さや積む順番を順序づけたり、バランスをとるために向きや置く場所を考えたりしながら、たくさんの物理的知識と同時にたくさんの論理数学的知識が構成されており、積み木遊びには、手先の感覚と運動機能を陶冶するものだけでなく、とても頭を使う遊びである」としている。

贈呈から半年後、一人の幼児が積み木で楽しく遊ぶビデオ映像が届けられた。そこには、自分から積極的に積木を高く重ね喜んでいる姿や、母親が積木で滑り台に見立てて一緒に遊ぶ姿があった。1歳半の時には見られなかった姿であり、この間の子供の成長発達はめざましいものがある。このように、積み木セットを喜んでもらえると同時に、冷静にこのビデオ映像をみていくと、積み木を製作する目的や製作上の注意点(高く積み上げるためには重なり合う面が水平であることなど)が分かることから、木工授業での大切な学習教材となっている。

(4) 木育の推進「人間らしく生きることができる社会」

木育は、平成16年(2004)から北海道が発信し進めているもので、「木にふれあい、木に学び、木と生きる」取組である。子供の頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことを目的としている。

ウッドスタート運動は北海道が推進する木育の一つの活動形態であり、町や学校が率先して取り組む意義は大きい。

北海道の木育がめざす人と社会について、

平成16年度協働型政策検討システム推進事業報告書⁶⁾から引用する。

○木育がめざす人づくり

- ・五感と響きあう感性を育みます。木と五感で「ふれあう」ことにより感性を高め、「手でつくり、手で使い、手で考える」経験を通して自分自身を大切にすることを知り、人や自然に対する『思いやりと、やさしさ』を育みます。
- ・共感を分かち合える人づくりをめざします。身近な人と一緒に木で遊び、木に学び、木でモノをともにつくる体験を通じて、楽しさや喜びを実感し、共感を分かち合い、それが私たちの暮らしを支える地域や社会、産業への関心へとつながるような人づくりをめざします。

○木育がめざす社会

- ・地域の個性を生かした木の文化を育みます。北海道においては、古来より受け継がれてきた人と森や木との関わりを見直し、この地に自然との関わりの中で生きてきた先住の人々の暮らしかたに学び、北海道の「木の文化」の構築をめざします。
- ・人と自然が共存できる社会をめざします。すべての人が思いやりとやさしさを持ち、地球という大きな『つながり』のなかで自然と共存し、人間らしく生きることができると社会を実現します。

引用が長くなったが、積み木の作り手である生徒も、使い手である幼児も「手でつくり、手で使い、手で考える」経験をすることで、楽しさや喜びを実感し、共感を分かち合い、それが地域や社会へとつながっている。それは、地域の個性を生かした木の文化を育み、人間らしく生きることができると社会を実現しているのである。木育がめざす人と社会は、A町ウッドスタート事業がめざすところと重なりあうものである。

A町ウッドスタート事業は、木育を推進している北海道水産林務部森林環境局森林活用

課木育グループから、各方面に情報提供されることになり、全国市町村会の会報誌や林業関係の新聞、育児雑誌の木育特集などに数多く取り上げられた。このことは、北海道の高橋知事にも伝わり、製作に当たった木工科2・3年生の生徒は、平成25年（2013）11月15日に知事を表敬訪問し、親しく懇談する機会を得た。高橋知事からは、ウッドスタート事業の意義について、以下のようなコメントをいただいた。

「皆さん方が心を込めて作られた積み木で赤ちゃんが遊ぶことによって、北海道が世界に誇る木の文化を、人生の初めに味わえることは、本当に素晴らしいことです。地域をあげた素晴らしい取組であり、教育です。」

(5) 協働による地域文化の創造

A町ウッドスタート事業の特徴は先にあげたが、積み木を生徒から親子へ直接手渡して一緒に遊ぶことで交流が生まれていることである。そして、贈呈された親子は、子どもが遊んでいる様子や生徒への感謝や励ましのメッセージをハガキに書いたり、子供が積み木で遊ぶ姿の写真を撮り学校へ送るなどのお礼をしている。作り手と使い手による双方向のコミュニケーションが行われていることである。保護者から届いたメッセージには、次のような言葉が寄せられている。

◇「先日は手作りの積み木ありがとうございました。ほぼ毎日兄妹3人で遊んでいます。年齢、男女に関係なく遊べるので、一人が遊び出すと他の子も寄っていき3人で遊んでいる姿をよく見かけます。ステキなおもちゃをありがとうございました。大切に使います。」

◇「素敵な積み木をありがとうございました。妹にいただいたのに、上のお兄ちゃんが夢中で遊んでいます。これからも大事に使わせていただきます。口に入れても害はないので安心して遊ばせることができるので助

かってます」。

この文面からも、それぞれの家庭で子供たちが仲良く遊んでいる微笑ましい姿がうかがえるとともに、生徒への感謝の気持ちが伝わってくる。これらのメッセージは、作り手である生徒にとっては、心温まる励ましとして受け取られている。

学校祭などの販売会では、製品や収穫物を売ることによって完結し、買い手である人々から感想や意見をいただくことはなかった。ウッドスタートでは、使い手の意見や感想を聞くことで、次への改善にもつなげることができるのである。また、生徒への感謝や励ましの言葉は、生徒の背中を力強く押してくれることになる。作り手と使い手、生徒と地域の人々などが積み木を通じて交流し合うこと、一緒に遊び、喜び合うこと、生徒の真心には、真心で応えようとハガキの文面を考える保護者の内心には、すでに「心の協働」が見られるのである。特別支援学校の生徒と地域の人々などが協働することで、共通の「思いやりの心」が醸成されてきたのである。

ハガキによるメッセージは、生徒を励ますツールとなったが、生徒は、子供が積み木で遊ぶ姿を贈呈後は目にしていない。そこで、B高等養護学校は、贈呈した保護者に協力を求め、積み木で遊ぶ子供の写真を提出して頂いた。写真からは、「積み木で楽しく遊んでいるよ」というメッセージが伝わっており、写真を新たなコミュニケーションツールとして生徒達への無言の励ましとなったようである。そこで、少子化の時代において、子どもが遊ぶ姿は微笑ましい光景であり、町にとっても宝であることから、町の支援をいただき「A町ウッドスタート子ども写真展」を開催した。学校と親子だけでなく、地域住民にも広く浸透し、A町民の誰もが知ることとなった。

A町ウッドスタート事業とB高等養護学校の実践には、特別支援学校の生徒と地域住民との共感と協働による新たな文化が芽生えて

きていると言っても過言ではなからう。

(6) 広がり「まちづくりへの貢献」

ウッドスタートを実施している自治体は毎年増加し、平成28年度（2016）末時点で18市町村が実施している。平成29年度（2017）から開始した島根県邑南町では、贈呈品を製作しているのは、地元島根県立F養護学校高等部木工班の生徒たちである。2年前、これからの町づくりを語り合う「おおなんドリーム」において、F養護学校の生徒が発表した、「子育て日本一の町づくりのために誕生祝い品を製作したい」との意見が採用されたのである。贈呈品となる積み木のデザインは、町内にあるG高等学校の生徒が担当しており、両校によるコラボ製品である（資料3）。地元の高校生と特別支援学校の生徒が、町が目指す「子育て日本一」の町づくりのために貢献できることを考え、力を合わせるなかに、協働と共生を見るのである。



資料3 島根県立F養護学校作成の積み木

平成28年（2016）に開校した北海道H高等支援学校では、誕生プレゼントではないが、平成29年度（2017）からI町の小学校に入学する新1年生に、入学記念品として木工製品のスツールにクッションを付けて贈呈する「サクラプロジェクト」を開始している。同校の木工科と家庭科の共同作品である（資料4）。



資料4 H 高等支援学校作成のツール

同じくJ町では、平成28年度（2016）から、町内の障害者支援施設が、社会貢献事業として、誕生祝いに木工製品を贈呈する事業を実施している。同施設は聴覚障害者を中心に、かねてから高い技術を持って家具や木製品の製作をしており、贈呈品のクオリティーも高い。50人近くの贈呈をすべて自前で実施している（資料5）。



資料5 障害者支援施設による贈呈品例

北海道内には、木工科がある高等養護（支援）学校が14校ある。また、福祉施設で木工作業を取り入れているところもある。ウッドスタートに限らず、ものづくりの技術を地域社会のために活かし、貢献することを期待したい。それは、共生社会が求める姿のひとつの形態であろう。

5. まとめ「地域社会との協働で新たな文化の創出」

A町ウッドスタート事業には、2つの協働がある。1つは、学校（教育）と町（行政）NPO（専門機関）との協働である。この三者が協定を交わし、特別支援学校を支援し、生徒を主体とした取組を行っていることである。町は、対象となる幼児の把握し、予算を計上し、事務的な運営を担っている。贈呈式には、町長や・教育長が出席し、町としても大切なセレモニーとなっている。よく言われることであるが、事業を継続的に推進するためには、「ひと・もの・かね」が整っていることである。その上で、従来の「連携」という枠を超えて、特別支援学校の生徒と将来を担う子供たちのために事業を推進するという『チームとしての意識』が大切である。関わる人のすべてが、この事業の良さを実感しているからこそ、それぞれの役割が果たされる。事業推進の核となる人々の協働が第一義的に重要なのである。

もう1つの協働は、生徒と幼児（保護者）や園児（保育園）との協働である。生徒が幼児や園児に楽しく遊んでほしいとの思いを込めて製作した積み木で一緒に遊ぶこと、保護者がハガキや写真で感謝の気持ちを表すこと、園児が「ありがとう」の気持ちを表すために折り紙や感謝状を作ること、そこには、人に対する素直な『思いやりと、やさしさ』が満ちあふれる協働の姿がある。

馬場⁷⁾（1997）は、「教育と福祉文化」の中で、「例えば高齢者との交流、障害者との交流、外国人との交流などといった、多様性を知り、様々な価値観を理解するといった段階に加えて、そこから新たな文化を創り出すといった段階を目指す必要がある。「交流」が単に「かわいそうな」人たちと接する機会にならないようにするために、「文化」を創り出すことで、お互いの価値観を認め合うと

ころまで発展できるはずである。」と、新たな文化を創り出すことによる共生のあり方を提案している。

A町ウッドスタート事業は5年目を迎え、積木を贈呈された幼児の数は、まもなく100名に及ぶ。事業を推進する人々には『チームとしての意識』を持った協働があり、地域の人々には『思いやりと、やさしさ』を持った協働がある。そして、B高等養護学校の生徒は、必要とされることに喜びを感じ、真心を込めて積み木の製作に励んでいる。贈呈を重ねるごとに地域に浸透し、地域の新しい文化として醸成されれば、共生社会のあるべき姿が見えてくるのではないだろうか。

共生社会の実現に向け、これからは、社会との協働の中身、在り方が問われてくるが、A町ウッドスタート事業におけるB高等養護学校の実践と地域の取組は、学校及び地域社会にとって大いに参考となるものであり、今後の取組にも注視していきたい。

謝辞

本研究報告をするにあたり、A町ウッドスタート事業およびB高等養護学校の実践については、関係者各位からの多大な協力と資料提供を得ることが出来た。過疎化が進むA町の活性化に少しでも協力できることを期待して、関係者への謝辞としたい。

引用・参考文献

- 1) 菊池一文(2013)：特別支援学校におけるキャリア教育の推進状況と課題。特別支援教育研究，東洋館出版社。
- 2) キャリア発達支援研究会編(2015)：キャリア発達を支援する教育の意義と共生社会の形成に向けた展望。キャリア発達支援研究2，ジアース教育新社。
- 3) 尾崎祐三・菊池一文監修(2013)：知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き(実践編)。ジアース教育新社。
- 4) 鎌野智里(1998)：保育遊具としての積み

木の教育的意義。美術教育(日本美術教育学会277)

- 5) 加藤泰彦(2007)：積み木遊び「子どもの遊びと発達I」。C.カミイ，加藤泰彦編書。大学教育出版。
- 6) 木育推進プロジェクトチーム(2005)：平成16年度協働型政策検討システム推進事業報告書。
- 7) 馬場清(1997)：教育現場における福祉教育。福祉文化論。有斐閣。